

# 大学生における高校家庭科学習の有用感と自尊心の関係について

## EVALUATION RATINGS BY COLLEGE STUDENTS FOR DOMESTIC—SCIENCE EDUCATION IN HIGH SCHOOL AND THE RATERS' SELF ESTEEM.

松原 洋子  
Yoko MATSUBARA

### 序 論

研究背景 中等教育における家庭科は4単位であったが、2単位の家庭基礎という科目が導入され(伊藤, 2013)、2015年にはこの2単位のみ履修という方針の高等学校が大半になってきた(文部科学省教育課程部会, 2015)。このような単位数と学習時間減少について調査された中に、生活に必須の知識や技術の修得不足や、生活の科学的把握力不足が生じているという報告もある(国立青少年教育振興機構, 2015)。家庭科教育において「生活を営む力」の育成と「人格形成」という2つの目標が達成できていないのではないかという見解がある(佐藤・平田・河原・小橋・原田, 2009)。これらに係る研究も少なくないが、これまでの先行研究は後述のように家庭科を学習中の中・高校生を対象としたものが多く、将来自立した時はこうなるだろうといった想像に基づく回答になっていた面が相当あると思われる。高校までの家庭科履修後に、それまでとは異なる自立度の高い生活を送るようになった大学生が、大学生が家庭科学習をどのように見ているかという調査と人格形成の観点のひとつである自尊心との関係の検討を通じて、教員養成課程の指導の在り方の再検討が図れるのではないかとと思われる。

教育系研究における自尊心 学習指導要領の中に人格の形成という項目があるため、先行研究では家庭科教育の効果と自尊心との関係を調べたものも多くみられる。花形(2017)は家庭科教育とジェンダー感、また生活の自立度などとの関係、また、藤田・古城(2017)は家庭科学習内容の実践と自己肯定感を検討して<sup>注1)</sup>。

中学校家庭科において、教師によるサポートだけでなく、生徒間の関係や、生徒の個人的教材選択、振り返り自己評価などを取り入れた授業実践を個々の自己肯定感を高める取り組みとして行った報告がある(長谷川・松永・懸川, 2012)。また、佐藤ら(2014)は、中学校家庭科で保育導入学習(Flour Baby Project)を行う前後に自尊感情と人間関係の変化を検証するための心理測定尺度を使った試みを報告している。さらに、幼児とのふれあい体験が自尊感情の向上に効果があるとした報告(叶内・倉持, 2014)もある。また、佐藤ら(2009)

は中学校家庭科の研究において、既存の自尊感情尺度も含めた心理傾向を調べる調査用紙を作成し、その信頼性を検討している。

国立青少年教育振興機構(2015)によると、日本の青少年の自尊感情は低いという調査結果になっており、このような現状について濱保・岡田(2019)は友人関係構築の困難さや学習意欲の低下は自己肯定感の希薄さが原因となっていると考え、道徳教育を通して自尊感情を育てる指導法について研究報告を行っている。教育系研究においてはここに挙げた以外にも多くの先行研究や調査報告がある。このように自尊心を支え、育成する教育が大切だと主張する教育系研究が多数ある。しかし、これらの研究では自尊心の測定がすべて質問紙による調査で行われてきた。他方、近年の心理学の基礎研究では自尊心の種類と各々の測定法について研究が進んでおり、必ずしも自覚されていない自尊心に関して質問紙法とは異なる潜在的態度測定の検討が行われており(山崎・横嶋・内田, 2017)、その観点での検討も必要ではないかと思われる。

心理学系研究における自尊心 心理学の日本での研究において、セルフ・エスティーム、自尊心、自尊感情など様々な用語が使われているが、以下では先行研究論文ごとの使い方と記述し、あとで、本稿での用語を統一する。自尊心について、20世紀にはRosenbergによる定義が広く受け入れられた(山崎ら, 2017)。山崎ら(2017)はこのRosenberg定義における高い自尊心は自分を「まあ、よい(good enough)」と捉えることだと訳している。Rosenbergは自分を「よい(very good)」と捉えているという場合についても言及しているが、彼自身が作成した自尊心測定尺度については、「まあ、よい」と思うかどうかを回答するものとした(山崎ら, 2017)。この尺度は、自分が他者より優れていると思うかどうかではなく、ただし自己満足でもない自尊心を調べるものだと考えられていた(山崎ら, 2017)。

山崎ら(2017)は、さらにその他の定義として自身あるいは自己概念に関するものや、自己肯定感と関係づけるものがあつたとし、これらは各々異なる側面があつても基本的には同様のものだと考えている。

山崎ら(2017)はその後の研究をレビューする中で、セルフ・エスティームが有害であるような場合の存在を示す研究が出てきていること

を重視している。そのような研究として、例えば、Baumeister(2001)は低いセルフ・エスティームと暴力との間に関連は見られず、高いセルフ・エスティームをもち、なおかつ侮辱されたときに、高いナルシズムをもつ人は最も攻撃的になるとの研究報告をあげている。また、Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs(2005)はその他の側面についてもまとめているおり、それまでの研究結果には混乱した側面があるとしている。

さらにその後の研究で主流になった考えとして、機能的な相違(情報処理過程の相違)に関する区別の検討が始まり、山崎ら(2017)は自尊心(セルフ・エスティーム)には少なくとも意識的自尊心(顕在的自尊心)と自覚のない自尊心(潜在的自尊心)の2種類があるという説についてレビューした上で、この2つの自尊心について理論的な検討を行っている。

山崎ら(2017)は、他者の影響を受けやすく顕在的な他律的セルフ・エスティームは意識的にとらえ得る程度が大きく、自己評定式の自尊心の測定結果(顕在測定)に関与しやすいとし、自覚がなく他者評価の影響を受けない自律的セルフ・エスティームは質問紙法ではなく、潜在連合テスト(IAT)によってしか測定できないと論じている。

賀屋・道下・横嶋・内田・山崎(2020)は、教育におけるセルフ・エスティームの育成について、自律的セルフ・エスティームの増減を可視化する必要を論じている。他律的セルフ・エスティームを指標として教育を評価するようなことを実行してしまった場合、かえって不適応的な方向への変化を促してしまう可能性を考慮すべきだという主張である。

森尾・山口(2007)は高い自尊心がナルシズム(自己愛性)に結びつくのは、変動性が高く不安定な内在的自己評価による場合であると結論している。

小塩・西野・速水(2009)は、低い顕在的(自覚されている)自尊感情と高い潜在的自尊感情があるときに、他者軽視傾向が強く表れるとしている(小塩ら, 2009)。

藤井(2014)は高い顕在的自尊心のある人について、潜在連合テスト(IAT)を用いて潜在的(自覚されていない)自尊心を測定し、顕在的自尊心の測定結果も含めて、自己愛(ナルシズム)との関係を検討し、これまでの研究とは異なる傾向を見出して、実証的・理論的な検討がまだ必要だと論じている。また、藤井・澤田(2014)は、他者の不幸などを喜ぶというシャーデンフロイデと潜在的自尊感情の関係、またその他者の社会的状況との関係を検討している。

#### 潜在的(自律的)自尊心とその測定方法

ここまでの記述において、セルフ・エスティームや自尊心という用語を使用してきたが、ここから、教育系の高校までの家庭科教育研究との関連を考慮して、それらの大半で用いられている自尊心に統一し、また潜在的で自覚のない自尊心について、自律的自尊心と記述する。

自律的自尊心の測定は潜在連合テスト(IAT: Implicit Association Test)を用いる必要があるとされる(山崎ら, 2017)。このテストは、刺激単語を分類していく課題の実行にかかる反応時間の測定を行う方法であり、当初はコンピュータによる刺激呈示法が使

われていたが、その後、一定の刺激語数を呈示して、制限時間内にいくつの分類を達成できるかを調べるというやり方の紙筆版も工夫され使用されるようになってきた(e.g., 小塩ら 2009; 藤井・澤田, 2014)。山崎ら(2017)は、質問紙への回答は、意識的判断に基づくものであるために、様々な要因が関与して歪んだ結果が得られやすいことを指摘し、また IAT は、実施及び得点計算の容易さ、信頼性・妥当性などの優れた心理統計的性質を持つと指摘している。

#### 目的と方法について

目的 高校までの家庭科学習を終えた大学生がその後の生活で家庭科学習を生活の中に活かしているか、また将来役立つと捉えているかどうかを調査し、高校までの家庭科教育の有用性を振り返り、これからの家庭科学習について、家庭科教員養成課程で学ぶ、学生の育成につなげるための手がかりを得ることが本研究の目的の一つである。

大学生の場合は寮やアパートでこれまでとはかなり違う自立した生活を送っている。また、自宅生の場合もかなり自立に近づいた生活になり高校生より自立した生活を1~2年経験した上での回答と想定できる。そのため、高校までの家庭科内容の学習について大学生になってからの、より自立に近い生活に活かしているかどうかという自覚を調べることにすると想定できよう。ただし今回の調査対象は、食物学科という家庭科に関連する学科の学生を対象にしており、家庭科の内容に関して興味・関心がもともと高い学生が多いと考えられる。そのため、結果について、より一般的な大学の学部・学科の学生にまで一般化することは難しいかもしれないが、しかし食物学科を志望するような学生が、家庭科についてある程度以上の動機づけをもって学習していたとすれば、学習意欲の高かった生徒における有用感、一通り学習した結果に関する回答になると考えられる。つまり、やる気が弱かったために良く勉強していなかったことについて有用感を尋ねるのは、高校生までの学習実態の調査にはなっても、学習した結果に関する有用感の調査とは異なるものになると考えられるということである。その意味で、今回のような形で、高校の家庭科学習で求められている内容に関して検討することの意義はあると思われる。

もう一つの目的は、これまで教育系の研究で行われてきた、家庭科教育による自尊心への影響の再検討を踏ることである。これまで行われてきた家庭科教育と自尊心の関係を最近の基礎研究系の心理学で行われてきた自尊心の種類を検討する潜在連合テストを用いて再検討することである。

家庭科有用感と大学生生活での役立ち感 家庭科有用感については、熊本県高等学校教育研究会課程部会(2015)、藤田・古城(2017)、花形(2017)の3つの調査で用いられた質問項目の中から、中高生の日常生活・授業等また学校生活に特化した質問以外の中から、家庭科の学習内容に関する質問項目であって、かつ大学生が回答できるものを選択した。

ただし、ここで用いる質問内容は家庭科で学ぶ個々の内容につい

て、普段の生活で「何々をする」という文に対して、当てはまる程度を5点尺度で答えるものである。この質問は学習内容について、どのくらい実行できているかという質問であり、個々の項目について、学校で学んだ家庭科教育が有用であったと思っているかどうかを直接訪ねるものではない。このような質問としたのは、例えばボタン付けができるようになっていることの自己判断はできても、そのような個々のことについて「学校の家庭科で学んだからできるようになったのかどうか」の判定まで行うのは無理であろうと想定したからである。個々の内容について、学校で学び練習した成果と、家庭で教えてもらったり、自主的練習をしたことなどの区別は殆どできないであろうと想定される。したがって、ここでは個々の内容について家庭科および家庭等で学んだことの複合として、できるようになっていると思えるかどうかを問うものとして、家庭科学習内容に係る「有用感」という意味合でこの言葉を用いる。

ただし、個々の詳細な内容についての出典記憶 (source memory) は失われていても、家庭科の全体的な印象としての記憶 (要点記憶 gist memory) であれば、評価は難しくはないと想定される。これに関する質問として現時点での大学生生活に関するものを2つ追加した。一つは「家庭科で学んだことを今の生活に活かそうとしている」、二つ目は「家庭科で学んだことが将来に役に立つと思う」である。

自律的自尊心測定 本研究においては紙筆版 IAT を使用し、自律的自尊心の測定を行う。この測定には横嶋・内山・内田・山崎 (2017) が開発した児童用紙筆版を元に、大学生向けになるように作成したものを使用した。これまで成人用紙筆版 IAT がいくつか開発されているが、これらは「自分」と「他者」などを対比するようになっており、これでは他者蔑視傾向が混入する可能性が指摘されている (横嶋ら, 2017)。横嶋ら (2017) の児童用 IAT は、「自分」と「自分以外」を対比するようになっており、この方式が最も妥当だと判断し、これを元に大学生向けに刺激語を漢字に変換し、また刺激単語数を増やした形にして作成した。回答方法を説明する教示も潮村 (2015) の学生向けのものを使用する。また横嶋ら (2017) が開発した潜在的自尊心を測定する児童用紙筆版の IAT は、カウンターバランスを取らずに実施することが可能との検討結果が報告されていることも、この方式の優れた点である<sup>注2)</sup>

他律的自尊心測定 自覚されている自尊心測定は、これまで広く用いられてきたいくつかの顕在的自尊心尺度には、様々な要因の混入や回答バイアスが指摘されていること (山崎ら, 2017) と、また上述のように、自覚されている自尊心は他律的なものが基本であるという研究 (山崎・横嶋・賀屋・山口・内田, 2018) も考慮し、賀屋・山口・横嶋・内田・山崎 (2018) によって他律的な面に特化するように開発された「他律的 (随伴性) セルフ・エスティーム尺度」が最も妥当なものだと考え、これを採用した。ただし、これは児童用であるため、質問文に漢字を増やし、また回答尺度を4段階から5段階に増やすことで大学生用として作成したものを使用し、他律的自尊心を測定した。

## 脚注

注1:ここでの自己肯定感は自尊感情と同意

注2:横嶋ら (2017) のコレスポンディング・オーサーである山崎勝之教授より、この児童用を参考に大学生版を新たに作成したとしてくださいとのメッセージをいただいている。

注3:賀屋ら (2018) のコレスポンディング・オーサーである山崎勝之教授より、この児童用を参考に大学生版を新たに作成したとしてくださいとのメッセージいただいている。

## 方 法

### 予備調査

食物学科の大学4年生8名を対象に予備調査を実施した。予備調査の参加者には所要時間と質問文へのコメントを記録するのみとし、データ自体は残さないことを伝えた。自律的自尊心課題では、練習題では10秒間にできた回答数を、本課題では項目すべてをカテゴリー化するのにかかった時間を測定した。この結果から本調査での本課題解答時間を20秒に設定した。また、説明開始から調査回答終了までの所要時間を計測した。また、個々の説明や質問項目について理解しにくい文章や表現がないかについても意見を問うた。ここで読みにくいなどの指摘があったレイアウト等について訂正し、本調査用の冊子を作成した。倫理的配慮については予備調査用冊子のフェイスシートにインフォームドコンセントについて表記し、口頭でも説明し、賛同を得た回答者のみ回答を求めた。

### 調査時期と参加者

調査は2021年7月に食物学科の大学2・3年生 (計164名) を対象に実施した。このうち回答に不備があったもの (18名) を分析から外したので、計146名が有効回答数であった。調査は講義の時間を一部お借りして、集団で行った。また、調査用冊子は全員が回答終了した後、その場ですべて回収を行った。

### 調査冊子内容

フェイスシート等 表紙の次に研究目的、そしてインフォームドコンセントに係る文章と同意に係る選択肢を設け、その次のページに学年や性別 (3選択肢) などの質問を設定した。

その次のページから、まず教示と練習課題を伴う自律的自尊心測定課題 (IAT)、評価尺度回答練習としてダミー質問セット、その次に生活自律度・家庭科有用感質問セット、そして最後に他律的自尊心質問セットの順で配置して調査冊子とした。

2ページ目に記載されているインフォームドコンセントに係る文章を口頭でも説明した上で、研究への協力を依頼し、同意が得られた人へのみ回答を求めた。その後、回答法の説明・教示等を行った。

自律的自尊心測定 紙筆版潜在連合テスト (横嶋ら, 2017) による児童用紙筆版のテストを参考に、コレスポンディング・オーサーの了承を得て、漢字の付加、刺激語数、また教示等を変更して、大学生向けに作成した。横嶋ら (2018) の「自分」と「自分以外」を対比する設定に

従い、他者蔑視傾向が混入しないようになっているものである。

生活自立度・家庭科有用感質問セット 大学生の生活自立度・家庭科有用感について調査するために、熊本県高等学校教育研究会課程部会(2015)、・藤田・古城(2017)、花形(2017)、および長谷川ら(2012)による4つの調査で用いられた質問項目の中から、中高生の日常生活・授業等また現在の学校生活に特化した質問以外の家庭科の学習内容に関する質問項目で、かつ大学生が回答できるものを選択した。また、大学生生活に関して、「家庭科の授業で学んだことを今の生活に活かそうとしている」と、花形(2017)が用いた質問文「家庭科で学んだことは将来に役立つことだと思う(花形, 2017, p210 および p211)」の2項目を追加し、21項目とした。これらの質問項目について「当てはまらない」「やや当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「当てはまる」の5件法で回答するよう依頼した。

他律的自尊心尺度 賀屋ら(2018)によって開発された「他律的(随伴性)セルフ・エスティーム尺度」の質問セットを使用した。ただし、これは児童用であるため、コレスポンディング・オーサーの了承を得て、質問文に漢字を増やし、また回答尺度を4段階から5段階に増やすことで大学生用として作成した。

#### 倫理的配慮

調査対象者に研究の目的、実施方法や内容、調査で個人が特定されることが無いことや回答への拒否権があること、回答の途中でも質問によって答えたくないければ記入を放棄しても構わないことや質問に答えないことによって不利益を被ることは無いことを調査実施前に口頭で伝えた。また、調査用冊子のフェイスシートにもその旨を表記し、同意する方のみの回答を求めた。さらに今回の質問冊子に含まれる潜在的自尊心測定課題が、自尊心に関係のあるものだと気づかない回答者があるかもしれないことを考慮し、質問冊子の最初のページにあるインフォームドコンセント関係部分において、通常の記述に加えて特に「自尊心に関係するものに答えたくない方は、質問冊子全体について回答を拒否してください」という一文を追加し調査時に口頭でも伝えた。調査および予備調査は、美作大学研究倫理委員会の承認を得た上で実施した。

#### 結果および考察

家庭科有用感質問 家庭科有用感質問セットについて、因子分析を行った。固有値1以上の基準とスクリープロットの視察により5因子とし、プロマックス回転を用いた。一つの質問で小さな因子負荷量となった。この質問は学習指導要領・教科内容の分類に当てはまらない項目であることもあり、これを外して、再度因子分析し、因子負荷量0.40以上を採用した結果、5つの因子はそれぞれが家庭科の学習内容に対応していた。「因子1・生活の自立」、「因子2・共に生き、共に支える」、「因子3・経済生活を営む」、「因子4・技術力」、そして「因子5・生活実践力」と命名した

全体に自身の現在について高く評価している学生が多くみられる。特に、「生活実践力」が付いたことに対する評価は極めて高く、個人差も小さい。「共に生き、共に支える」「技術力」の2つについては比較的高い評価になっている。しかし、「生活の自立」「経済生活を営む」については高い評価をしている学生がやや少なく、平均値・中央値が少し低くなっており、かなり低い値を回答した学生も少なくない。調査回答者は寮やアパートで生活している人が8割を占めているので、高校生の時とは生活が大きく変わり、自立に近い生活を送っている学生の比率が高いことを考慮すると、自立と経済生活について、低く評定している学生が少なくないことは、若干気になる結果である。

「家庭科で学んだことが将来役に立つと思う(花形, 2017, p210,211)」については、高い評定値を答えた人がかなり多く、個人差も小さく、特に低い値を回答した人は殆どいない。それに対して「今の生活に活かしていない」と回答した学生は25%おり、個人差も大きい。今の生活に活かせていると思っている人も多いのであるが、他方、「全く活かしていない」から「どちらともいえない」までの間に 25%の人が含まれている問題は、今できていないのに、今よりさらに自立度を高める必要がある社会人になれば出来ると思うような自信の持ち方ではないだろうか。

自律的自尊心 採点方法は「自分・快語」の正答を合計し、そこから「自分以外・快語」の合計正答数を引いたものを自律的自尊心とした。誤答率が 40%を超えた回答者は3名であった。この3名が教示通りの回答を行わなかったとしても、統計を大きく歪めることはないであろうと判断し、除外はしないと決定した。

他律的自尊心 他律的自尊心質問セットを因子分析したところ固有値は2因子を示唆したが、スクリープロットの視察では1因子と思われるパターンであった。元の賀屋ら(2018)の尺度が1因子とされていること、また今回の分析でも1因子を仮定して得られる因子負荷量のパターンが1因子構造と矛盾がなかったことなどをふまえ、1因子構造だと判断した。

自律的自尊心と他律的自尊心の相関係数は0.058であった。この結果からこれまでの横嶋・賀屋・内田・山崎(2019)と同様に自律的自尊心と他律的自尊心の相関は見られなかった。調査対象者は人の目に影響される他律的自尊心は低い人も高い人もいて、個人差の広がり非常に大きかったが、自立の自尊心は高めになっている人が大半で、ネガティブになっている人はごくわずかという結果が得られた。

「学んだことを今の生活に活かそうとしている」を目的変数とする重回帰分析結果では、家庭科有用感の内「生活の自立」と「共に生き、共に支える」また「技術力」との関係を示唆するものとなった。これは自立に近い生活を営む学生が多く、友人や周囲の人たちに支えられながら生活を送っているという実感があるものと推察される。また、日常の家事を自分で行い、自分で食事を作り、身の回りのことをしている学生が多いため技術力の重要さを感じているのであろう。

「家庭科で学んだことは、将来役に立つことだと思う(花形, 2017, p210,p211)」を目的変数とする重回帰分析では技術力の修得との

関係が有意であった。現在実際に高校までに修得した技術力の有用感を高く評定している回答者は「将来役に立つ」の評定も高い傾向がある。今よりさらに自立度の高くなる将来の生活を予測するにあたって現在よりも技術力が必要となると推測しているからではないだろうか。

家庭科有用感と自尊心 上記の現在・将来に関する質問と家庭科学習内容の関係と同様に、自尊心の各々を目的変数とする重回帰分析も行った。家庭科の教育を通じて自尊心を高めることができていのかどうかを検討しようとした教育系研究が少なくないため、ここで検討される「仮説」は、家庭科学習から自尊心への影響である。ただし、逆の因果関係もあり得るが、ここではこの「仮説」に合致する傾向を見出せるかどうかの検討であり、この形での分析とした。自律的自尊心を目的変数とする重回帰の結果、 $R^2$  はごく小さく、かつ有意でもなく、家庭科学習内容有用感(生活自律度)の5因子とは関係は見られないという結果になっている。同様の方針により、他律的自尊心を目的変数とする重回帰分析も行ったところ、大きな値ではないが有意な  $R^2$  が得られ、他律的自尊心と家庭科因子の内「経済生活を営む」については関係があることを示唆する結果となった。経済生活について学習したことのある有用感が高いことと他律的自尊心が高いことの間に、ある程度の関係が見られる。経済生活が他者からの評価を受けやすく、自覚されやすいのではないかと推測される。

## ま と め

家庭科有用感の分析結果については家庭科の授業内容の項目にすべて対応していた。今回の調査では家庭科内容有用感の因子の平均を見ると全体に高いが、その中でも「生活の自立」や「経済生活を営む」といった因子では個人差が大きく、できていると答えた学生もやや少なかった。これに対し「生活実践力」については因子平均がかなり高く、個人差も少なかった。

また、「共に生き、共に支える」「技術力」の学習内容について「生活実践力」ほどではないが、できていると感じている学生が多い。これは調査対象者の生活が高校生の時とは大きく変化し、生活における主体者となり、自立に近い生活を送っている学生の比率が高いことが関係をしていると推測される。

ただ、現在と将来について尋ねた質問では、生活の主体者となったが家庭科で学習した内容を今の生活に活かせていないと回答した学生も少なくないため、個人差が最低値から最高値まで広がっている。これは自宅生・寮生・下宿生とそれぞれの生活形態の差が起因している部分もあるのかもしれない。今回の調査対象者の生活形態は自宅生 20%、自宅以外(下宿・寮)80%の割合となっている。

これに対して、家庭科の学習が将来役に立つと考えている学生はかなり多く、現在の生活についての質問と比べて低い値の回答が殆どなくなっており、このために個人差が非常に減少している。現在は活かせていないに関わらず、将来はできるようになると思っている人が相当の人数いることを示している。この相違が、根拠のない自信や

楽観視によるものなのか、あるいは現在も家庭科に関連する内容(食)を継続して学び、その有用性や将来の職業選択との関係もあることによるのかは、今回のデータだけでは検討できない。家庭科で学んだことのうち「技術力」だけが将来にわたっても役に立つと捉えている学生が多いが、その他の因子ではその傾向は見られなかった。このことから高校までの家庭科学習で、「技術力」に関わる学習内容以外で将来役に立つと捉えられる学習の工夫が今後、家庭科教員養成課程で学ぶ学生の育成に有用となるのではないだろうか

自律的(潜在的)自尊心と他律的自尊心の間には殆ど相関がなかった。このことから、両者は各々別のものを測っていると考えられる。今回の調査では人の目に影響される他律的自尊心は低い人も高い人もいて、広がりも大きいのが、必ずしも意識していない自律的(潜在的)自尊心は、少なくとも「自分以外」よりも「自分」への評価の方が高い(ゼロより大きい値)人が大半であり、ネガティブな値になっている人はわずかであった。

家庭科内容有用感と「高校までの家庭科で学んだことを今の生活に活かそうとしているか」の関係を見ると、「生活の自立」、「共に生き、共に支える」と「技術力」に関しては関係性が見られる。しかし、「学んだことが将来役に立つと思う」と家庭科有用感の関係を見ると、関係があることを示したのは「技術力」だけであった。どちらについても、相関だけで見ると関係があるようにみえるが、5つの因子の各々について、他の因子が一定であるときの関係を推定する分析では、因子の中の一部との関係によるという結果になった。

さらに、自律的(潜在的)自尊心と家庭科5因子は関係していないという結果がみられたが、他律的(顕在的)自尊心と家庭科有用感の一つの因子である「経済生活を営む」については関係があることを示唆する結果となった。

## 本研究の限界

今回の回答者集団は、もともと家庭科関係のこと、特に食生活に関わる知識やスキルに関心が高く、おそらく高校までに家庭科の学習に動機づけが高い人が多かったであろうと想定される集団である。つまり、今回の結果は家庭科について、少なくともある程度は学習してきた人に関する調査である。したがって、今回の結果と考察をより広い学生集団に一般化することはできない。

また、アパート・寮生活の比率が高いということがあり、この大学における食物学科学生の全体的傾向を示すデータである。しかし、人数の関係もあって、アパート・寮の居住か自宅からの通学かを分けた分析はできていない。これについては、今後の課題である。なお、性別については、男性の回答者が少数のため分析を行うことはできなかった。

## 引用文献

Baumeister, R. F.,(2001). Vioient Pride. *SCIENTIFIC AMERICAN*. April, 2001.

(鈴木圭子訳, 2001. 自己愛に潜む暴力. 別冊日経サイエンス

- 230, 94-100)
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2005). Exploding The Self-esteem Myth. *SCIENTIFIC AMERICAN*, January, 2005.
- (日経サイエンス編集部訳・千葉啓恵翻訳協力, 2005, 前向き思考で成功できるか. 別冊日経サイエンス 230, 86-93)
- 国立青少年教育振興機構 (2015). 高校生の生活と意識に関する調査報告書ー日本・米国・中国・韓国の比較ー
- 藤井勉・澤田匡人(2014). 自尊感情とシャーデンフロイデー潜在連合テストを用いた関連性の検討ー. 感情心理学研究, 21, 114ー123.
- 藤井 勉(2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連. 心理学研究, 85, 9 -99.
- 藤田智子・古城輝海 (2017). 中学生の家庭科での学びの実践状況および自己肯定感との関連. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 68, 319 - 330,
- 長谷川雅美・松永あけみ・懸川武史 (2012). 生徒一人一人の自己肯定感を支える中 学校家庭科の授業づくりの検討. 群馬大学教育実践研究, 29, 163-171.
- 濱保和治・岡田大爾(2019). 自尊感情を育てる道徳指導法の研究ー生命尊重の授業展開を通してー. 広島国際大学 教職教室 教育論叢, 11, 51-65.
- 花形美緒 (2017). 中学生期における「生活の自立」と「家庭内役割」を規定する要因ー「家庭科肯定感」と「家庭科将来有用感」に着目してー 日本家庭科教育学会誌, 59, 206ー217.
- 伊藤葉子(2013), 家庭科の授業時間数減少をめぐる課題. 日本家政学会誌 64. 451-453.
- 叶内茜・倉持清美 (2014). 中学校家庭科のふれ合い体験プログラムによる効果の比較ー幼児への肯定的意識・育児への積極性と自尊感情尺度からー 日本家政学会誌, 65, 58 -63.
- 賀屋育子・道下直矢・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之(2020). 「自律的セルフ・エスティーム」を育成するユニバーサル予防教育の開発. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 34, 47-54.
- 賀屋育子・山口悟史・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之(2018). 児童用の他律的(随伴性)セルフ・エスティーム尺度の開発ー尺度の信頼性と妥当性の検討, そして教育への適用の考察. 兵庫教育大学教育実践学論集, 19, 1-12.
- 川崎直樹・小玉正博(2010). 潜在的自尊心と自己愛傾向との関連ー Implicit Association Test 及び Name Letter Task を用いたマスク・モデルの検討. パーソナリティ研究, 19(1), 59-61.
- 熊本県高等学校教育研究会課程部会(2015). 家庭科学習ノート, p 11.
- 河原浩子・平田美智子・原田省吾・佐藤ゆかり・佐藤園(2014). 中学校家庭科における Flour Baby Project 学習による生徒の心理傾向(自尊感情・人間関係)の変化ー 家庭科学習評価への心理測定尺度適用の試みー. 日本教科教育学会誌, 37-1, 31-41.
- 森尾博昭・山口勉(2007). 自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性ーナルシズムとの関連からー. 実験社会心理学研究, 46, 120-132.
- 文部科学省 (2015)教育課程部会 教育課程企画特別部会(第9回). 高等学校における教科・科目の現状・課題と今後の在り方について(検討素案). 配付資料, 資料 2-1, 49-55
- 文部科学省 (2009). 高等学校学習指導要領
- 文部科学省 (2018). 高等学校学習指導要領
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦(2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連. パーソナリティ研究, 17, 250-260.
- 佐藤園 平田美智子・河原浩子・小橋和子・原田省吾(2009). 中学校家庭科被服学習における子どもの被服関心・自尊感情形成評価への心理測定尺度適用の試み(1)ー 教科としての目標達成を目指す家庭科評価研究(第3報)ー 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 140, 105-11.
- 潮村公弘(2015). 潜在連合テスト(IAT)の実施手続きとガイドライン: 紙筆版 IAT を用いた実習プログラム・マニュアル. 対人社会心理学研究. 15, 31-38.
- 津田恭充・伊藤義美(2012). 潜在的自尊心および顕在的自尊心とパルノイアーイニシャル選好課題と星座選好課題を用いた検討ー. 対人社会心理学研究, 12, 103-109.
- 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子(2017). 「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築ー セルフ・エスティーム研究刷新への黎明ー. 鳴門教育大学研究紀要, 33, 1-17.
- 山崎勝之・横嶋敬行・賀屋育子・山口悟史・内田香奈子(2018). 他律的(随伴性)セルフ・エスティームの概念と測定法. 鳴門教育大学研究紀要, 33, 9.
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之(2017). 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発ー信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討ー. 兵庫教育大学 教育実践学論集, 18, 1ー13.
- 横嶋敬行・賀屋郁子・内田加奈子・山崎勝之(2019). 児童用の簡易版セルフ・エスティーム(SE)潜在連合テストの開発の構想ー 自律的ならびに他律的 SE を同時に測定する, 紙筆版とタブレット PC 版の測定法開発に関する理論. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 33, 141-148.
- 横嶋敬行・山口悟史・賀屋育子・内田加奈子・山崎勝之(2018). 児童用の紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストー 実施の手順と採点方法の詳細の紹介, そして課題順序カウンターバランスの削除可能性の検討. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32, 101-110.